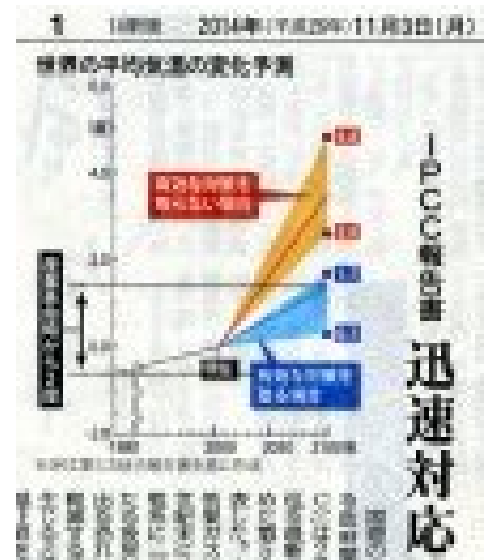


◇地球温暖化が加速している

以前、本屋さんで週刊誌を立ち読みしようと立ち寄ったところ、その週刊誌（週刊現代）のお題目があまりにもセンセーショナルだったので早速購入してしまった。（2014/7/19 号）そのお題目とは、気象庁も「予測不能」と匙を投げた、即死！「殺人気象」の夏がやってくるという見出しが踊っていたのである。そして、最近なんだか天気がおかしいと思うことが増えていないだろうか？突然の雷、巨大な竜巻が次々とやってくる。それは気のせいでない。いま、日本（世界）は確実に、新しい恐怖の時代に突入しようとしている。悪夢は、空から降ってくるというのである。

そこで、毎年のようにこの週刊誌報道を裏付けるかのような異常気象のニュースが絶え間なく伝えられている。今年（2022 年）も 4 月 29 日配信の CNN ニュースによると、インドを襲った記録的な熱波、週末にかけて一層過酷と報じていた。同年 3 月も 122 年ぶりの猛暑だったという。また、去年の暮れ（2021 年 12 月）、アメリカでは季節外れの巨大な竜巻が 30 個も次々発生し、広範囲の地域を襲い未曾有の被害をもたらしたという。さらに、欧州（ドイツ西部・ベルギー）では過去に記録にないというゲリラ豪雨が襲い、シベリアの永久凍土地では、巨大な穴が次々見つかると報じられたが、全て温暖化の影響という。ところが、永久凍土は大気中の 2 倍もの炭素を閉じ込めていると推計されるというから北極圏は世界平均の 2 倍のペースで温暖化が進んでいて、蓋の役割を果たす凍土層は夏の温暖化の影響で緩み、地中の炭素が噴き出した痕跡で、温暖化の原因となっている大気中の炭素濃度が更に上昇するというのである。そこで、欧州のゲリラ豪雨やアメリカで同時発生した数十個の巨大な竜巻は、まさに週刊誌が報道した様なのである。■写真・温暖化を報じる毎日新聞 2014/11/3 号

大槻伸次



極端な気候変動がみられるようになった

私が小学生の頃（昭和 20 年代）、冬季には 30 センチ位の降雪があるのは当たり前で、その雪解け後、日陰や学校の校庭は霜柱が一面にたち、日中になると溶けてぬかるんで校庭で遊べなかった。しばらくはその繰り返しで校庭が乾燥するまで続いた。

その対策として学校では石炭の燃えカスである石炭殻を校庭に敷いた。また、通学途上にある屋敷林の裏手に溜池があつていつも厚い氷が張っていた。そこで、その氷の上に乗ってさんざん遊んでから学校へ向かった。50 余年前の事、マイホームを田園の満々中に建て引っ越したはいいが、赤城嵐の直撃で震え上がった。そして陽の当たらない裏庭は霜柱で地面がいつも持ち上がり、その上を歩くと地面がざくざくと音がした。

当時、夜間の暖房は石油ストーブを焚いて電気コタツで過ごすというスタイルだったが、外気の冷え込みにアルミサッシのガラス表面に水滴が流れ落ち、翌朝サッシを開けようとするレールが凍みついて開けられなかったことが度々あった。

また、勤務先では屋外に設置された手洗い場の多数の蛇口が、防寒に耐えられず毎日のようにあちこちの蛇口が破壊し担当者は器具の交換に汲々としていた。現在は、そんな極端な寒さは年々少なくなったが、その反面冬季の気象の変動は大きくなったようで大雨や大雪など極端な気象が見られる。

その一例として、平成 26 年 2 月 2 週続けて記録的な大雪が降り 60 センチ超積もったが、こんな記録は過去に経験したことがない。ニュースによると関東地方の西半分、東京、埼玉、群馬県など多大な被害を被った。身近なところでは尾島の三菱電機のテントハウス倒壊、古い建屋や農業用ハウスなど多数倒壊し甚大な損害がでた。

当地区でも農業用ビニールハウスが倒壊した家庭が何軒もあった。ところが、被害農家は高齢ということもありビニールハウスの再建を諦め、ハウスでの野菜作りを廃業した農家があちこちみられた。また、我が家ではこの豪雪の時、海外旅行（モロッコ 10 日間）中で家を留守（H26/2/15～2/26）にしていたところ屋根に積もった大雪が凍って塊になり日中温められ落雪し駐車していた車の後部バンパーを直撃、その衝撃でバンパーが外れ地面に落下していた。こんな豪雪の経験は初めてで驚いた。

昔は 2 月も下旬のころになると必ず静か暖かい日があり春一番が吹き、早春の麦畑ではあちこち雲雀のさえずる声が聞かれたが、最近はいくぶん少なくなった。

また、菜の花の咲くころの雨降りは菜種梅雨といって「しとしと」と、やさしく（絹漉しの雨）降るものだったが、そんな情緒のある雨ふりの情景は見られなくなった。

桜の開花は早まり 3 月中旬から桜の開花便りが聞こえてくるようになった。とにかく気候の変動が極端で穏やかな花見日和は少なくなった。そして花と新緑の 5 月はあつという間に過ぎ去り、中旬になると蚊の発生が見られ花壇の手入れなどしているとやたらと痒いので始めて蚊の発生に気付かされる。

6 月に入ると梅雨の季節となるが、やはり昔の梅雨のころと異なり長雨がしとしと降る情景でなくなっている。全く雨の降らない空梅雨だったり、降ればバケツをひっくり返したような土砂降りの雨なんて記憶にない。現在は降雨は激しく地域差が極端で毎年何処かの地方が大水害などの災難に遭っている。また、晴れるととてつもなく蒸し暑く猛暑日となる。以前は梅雨のころは「さつき」の花びらの上にしとしとと長雨が降った。この季節は「さつき」をはじめ植物の「さし芽」に適していたが、どしゃぶりの雨と夏のような強い日差の繰り返しで繁殖に適さなくなっている。

このような極端な気候変化に全国的に竜巻が発生するようになり、竜巻の発生を予知する警報も出るようになった。過去には竜巻なんてアメリカのフロリダ地方の気象かと思っていたら日本でもあちこちで発生するようになり常態化した。

さらに、台風といえば 9 月というイメージであったが、現在は、7 月にも大型台風が日本列島を直撃するようになった。このような季節はずれの台風は梅雨前線とあいまって各地でがけ崩れなどの降雨災害が多発している。

うっとうしい梅雨は 7 月の 20 日前後にあけ本格的な夏がやってくるが、その暑さは尋常でなく連日のようにうだるような猛暑となる。一例として近くの館林や熊谷は真夏に 35 度を超える猛暑日を記録する有名な地方都市となった。西日本では多治見市も暑い都市として有名になった。

私が始めて車に乗ったのは昭和 43 年であるが、そのとき以来何回か車を使い換えたが、車にエアコンを装備していなかった。当時だって暑いことは確かだったが、我慢できないほどの暑さでなく車の三角窓を開けて走れば遣り過ごせた。

現在であればエアコンのない車なんか絶対に乗れないだろう。家の中も同様にエアコンのない住居なんて考えられないが、昭和 60 年代のころまでは家にエアコンが設置されていたが、使わなくてもなんとか生活できた。我が家の子ども達は、家にエアコンがあるのにどうして使わないのだろうと疑問を持ったくらいである。

当時だって 30 度を越える日はあり暑いことは暑かったが、35 度を超える猛暑日にはならず、夜間は外気が下がるため窓を開け自然換気するか三菱ウインドファンや、三菱扇風機で工夫すれば楽に凌げた。

三菱電機では夜の外気を室内に取り込んで冷房するウインドファンなるものを発売したが冷えすぎず好評だった。現在では夜になっても外気が下がらずウインドファンは役立たずとなり、エアコンが無かったら熱中症を患うこと請け合いだろう。昔は熱中症なんて聞いたことがなかった。義母はウインドファンをつけて寝るとすごく快適といって愛用していた。

私が子どものころは 8 月の月遅れのお盆を過ぎると決まって暑さが和らぎ、さらに天気がぐずつきはじめ秋を感じさせる季節になった。そうこうしていると 8 月 24 ころには夏休みも終わり 2 学期が始まった。そのころの学校には冷暖房装置など設置されてなかったが、困った記憶は無い。

8 月末から 9 月になると秋雨前線が出現し天気がぐずつくことが多くなり台風もきまって襲来した。秋の彼岸が過ぎるとたまには暑い日もあったが、秋が来たなと実感させられた。また、9 月 20 日前後の頃、祖父と隣町の小泉神社の社日祭に行くのが恒例だったが、暑くも寒くも無く静かな秋日和だった。そして 10 月にもなると初旬でもコタツが恋しくなるような日があった。

今では 10 月といっても残暑で自分の感じで 1 ヶ月くらい季節の変化が遅いなど感じている。秋を感じるのは 11 月ころからで紅葉は遅くなり色付きも悪い。太田近辺の盛りは 11 月下旬～12 月初旬ごろだろうから秋を感じるのは遅くなった。ある気象学者の研究では将来紅葉の盛りはクリスマスのころになると予測している。

ところが、自分自身気候が温暖化したら冬が暖かくなると思っていたらとんでもない誤解のようで、2014 年 2 月の大雪のように経験したことの無いような極端な気候変動が起こり寒さは厳しく感じられる。また、2021 年の冬は異常な寒波到来で、例年であれば地植えのミモザの木は難なく冬を越したが、上部が半枯れした。また、雲南萩やモロッコの夏目ヤシ（モロッコ旅行のお土産の夏目ヤシの実の種を播いたら全部生え何度か冬を越した。）は全滅した。

暖冬により暖房機の売れ行きに一喜一憂した

勤務先では昭和 30 年代後半から 40 年代の初めのころ冬の暖房器具として芯上下式の石油ストーブを発売した。その後、芯上下式の石油ストーブに代えて「三菱石油ファンヒーター」なる画期的な暖房機を業界に先駆けて発売した。

三菱石油ファンヒーターは大ヒットし最盛期は一シーズンで 100 万台近く売れた。ところが、大手電機メーカーは勿論のこと石油暖房機専門メーカーであるコロナやダイニチなど多数のメーカーも参入し競争が激化した。石油暖房機の売れ具合は大いに気になるところであったが、メーカー乱立の影響は皆無ではなかったが、その他の要因として冬場の最低気温がいくらになるかで消費者の購買意欲が大きく変化することが解った。そこで、その日の最低気温がいくらだったかがすごく気になっていたから、製管部長の朝の挨拶は「天気予報と朝の冷え込み具合」だったのである。ゆえに最低気温によって生産台数が変化するため我々製造管理部の設備部門としてその年の生産台数が、計画に対してどのように変化するのが気がかりだった。

ところが、期待に反して毎年のように朝晩の冷え込みが弱くなって、それに比例して石油ファンヒーターの売れ行きがはかばかしくなくなり私が定年後数年で撤退してしまった。

これまでの経験は通じない

平成 26 年（2014 年）8 月 3 日九州北部は突然の豪雨に見舞われた。3 時間で 205 ミリの豪雨、50 年に一度という驚くべき降水量を記録した。九州各地で避難勧告が次々出され、福岡県では高架下の通路が 1m60cm 近くまで水没した。崩れた崖の土砂がマンションに迫るなど土砂災害が広がった。このところ度肝を抜かれるような異常気象が次々と日本を襲っている。天気予報では連日「急な大雨や落雷に注意してください」警告され、70 代、80 代の住民が口々に「こんなことは初めてだ」と語る。

理屈はわからないが、実感として常識外のとんでもない状況にあるのは誰でも感じていることだろう。こうした超異常とも呼べる気象は、さらに激しさを増し、時には人を即死させるような激しい「殺人気象」がやってくる可能性すら指摘されている。

最初の異常事態は 6 月 24 日。東京三鷹市の・調布市などにゲリラ豪雨と激しい落雷とともに大漁の雹が降った。ほんの数分間に、道路は直径 1 センチほどの氷の塊が降り積もり、初夏にもかかわらず冬の雪景色のように一面真っ白になった。

テレビで降り積もった雹の山の映像を見て信じられない光景だった。また、落雷によって停電も発生し首都圏で約 1 万 1,100 世帯への電力供給が止まった。翌 25 日にはゲリラ豪雨によって関東各地で道路の完遂などが発生。埼玉県和光市では鉄道下のアンダーパス（掘り込み式の通路）が急に水没し、水に浸かった車にとりのこされた女性をレスキュー隊が救助する事態となった。

さらに 29 日にも、急な大雨で渋谷駅や代々木上原駅近くの線路下を通るアンダーパスが冠水。タクシーなどが水に浸かり、立ち往生する被害が出ている。また、8 月 19 日から 20 日にかけて広島市北部を襲った局地的豪雨（3 時間に観測史上最大とな

る 217 ミリの降雨を記録) による土砂災害は、死者行方不明者を合わせると 70 人を上回るという大規模災害。現地では自衛隊、警察、消防による日夜の救出活動が続けられた。ところが、大気の不安定な状況が一週間以上続き、二次災害も心配されることから救出活動が時々中断を余儀なくされた。また、災害にあわれた人たちは学校や集会所などに約 400 世帯 1000 人が避難した。

首都圏や日本全国各地（四国・木曽ほか）で立て続けに起こった異常気象はどうやら地球レベルで起こっている大きな気候変動の一部であるようだ。そのことは世界の科学者により報告されていると国立環境研究所研究センターの江守正多・気候変動リスク評価研究所長は指摘している。

気候変動によって「異常」だったはずの現象が常態化し、当然のこととして気象の予報もままならなくなるのである。

起こりえる最悪の事態

1888 年 4 月のインド北部のウッタル・プラデシュ地方では、オレンジ大の雹が激しく降り、屋外農作業をしていた人々ら 230 人が犠牲になっている。こうした被害が日本でも発生することは十分にありえるという。

ゴルフ場のプレー中なんとなく曇ったなと思いつつ、ドライバーを振り上げた瞬間、落雷が直撃。早く心臓マッサージをしてもらわなければ助からないが、周囲の木々にじゅうたん爆撃のように落雷が起こり、一緒に回っていた人びとは側撃雷（木などから横飛びしてくる雷）に襲われ、のた打ち回るばかりとなるだろう。

冷たい風など異常を感じたら注意しよう

天気予報で急な大雨や落雷が警告されている日は、いっそうの注意が必要である。これまで考えられないような場所で突然起こる極端な天気の流れ。それらはすぐに、超弩級の異常気象に変貌する危険をはらんでいる。そこでつい最近の事（2022/6/2）、群馬と埼玉を襲ったピンポン玉サイズの降雹により、高崎では梅農家、埼玉の深谷ではトウモロコシ畑が全滅したとの報道もあった。

思い起こせば昭和 38 年 5 月、勤務先のある尾島や埼玉県の本庄方面を襲った超弩級の降雹、あまりの被害の大きさに災害救助法が発動され自衛隊も出動した。降雹のあったその日は、朝から異常に蒸し暑く空気の匂いがおかしなと、普段感じたことの無い異様な空気感を感じていた。いざというとき、自分の身を守るには「この空はおかしい」「空気の匂いがおかしい」「変な音がする」と自分自身が気付けるかその一点にかかっているだろう。（2022/11/29 記・以前のを再編集）